

マドリッド日本人学校における漢字学習指導とその実践

前マドリッド日本人学校 教諭

秋田県横手市立増田小学校 教諭 佐藤伸吾

キーワード：マドリッド日本人学校、漢字指導、教材化、ゲーム化、家庭学習とのリンク

1. はじめに

マドリッド日本人学校では、漢字習得に力を入れている。定期的に行われる「チャレンジ漢字テスト」も、その証左だと言える。授業を担当していると、こちらが当然読めるであろう、分かっているであろうと思っている漢字を読めなかったり、書けなかったり、その使い方や意味を知らなかったりしている子どもたちがいる。これは、日本でもあることだが、もともと海外に身を置いている子どもたちにとっては、さらにとても難しいことだと思っている。そのことは、私自身のことと大いに重なり、その大変さを知ることができた。ここでは、そうした自分自身のことも含めて、以下述べていこうと思う。

2. 授業における漢字指導のアイデア

(1) 自身のスペイン語学習から得たヒント

私が、マドリッド日本人学校に赴任し、スペインでの生活を始めたときにぶつかったもの。それは、スペイン語である。この学校に赴任していなかったら、一切、興味関心のない言語である。しかし、その言語を多少なりとも覚え、使えるようになりたいと思い、自分なりに、いろいろな学習方法を試してみた。やはり、習得となるとなかなか難しい。とくに、スペイン語と英語は似ていると言われながらも、イメージの違いは否めない。例えば、テーブルは‘table’と英語で表すが、スペイン語では、‘mesa’である。また、ノートは‘note’と英語で表せるが、スペイン語では‘cuaderno’と表す。そのほかにも、なじみのない単語がたくさん存在する。それらを覚えるのは、当然大変だった。イメージと言葉の一致ができていないからである。

しかし、そこでふと気付いたのである。それは、日本という国のバックグラウンドがない子どもたちにとって同じなのではないかということである。日本の漢字・語彙がそういう存在であるならば、答えは見えている。イメージと漢字・語彙の一致を図ればよいという結論に至ったのである。

(2) 「イメージ漢字」の作成

テストを利用し、「使える漢字」の指導はないものかと考えていた。漢字・語彙は使ってこそ意味がある。使えないのは、意味やイメージが分からないからである。試しに、定期的に行われる「チャレンジ漢字テスト」の範囲の漢字を習得させるために、問題に出てくる漢字のイメージ化を図ろうと試みた。これまで、漢字の読み・書きを練習させ、合格させることはできていた。ちなみに、出題する漢字は、50個の例文中の読み書きを入れた20問であり、満点をとることが条件である。しかし、その言葉の意味を知らずに、また知ったとしてもイメージ化できずに練習させることは、漢字嫌いの一因を生むのではないかと考えられた。誰でも、知らない言葉をテストのために反復練習しているだけでは、練習している意味を見い出せないし苦しい。

そこで、漢字の反復練習よりも先に言葉の意味をとらえるところからスタートした。

私は、テスト範囲の漢字をイメージでとらえさせるため（以後、「イメージ漢字」と表現）、漢字、とりわけ文章の中での使い方も含めて、画像やイラストを添えた冊子を作り、子どもたちに配布した。これまで、辞書で意



支える（ささえる）

イメージ漢字の一例

味を調べながら行う方法も取り入れてはいたが、日本語そのものが苦手な子どもたちにとっては、辞書を引くたびに、分からない言葉を更に調べなければならず、結局意味をとらえることができずにいた現状があった。このイメージ漢字の冊子を配布後、絵を見てイメージしたほうが言葉の意味をとらえやすいと、日本語が苦手な子どもたちや保護者の方々にも好評だった。

(3) 「イメージ漢字」を使ったジェスチャーゲーム

言葉の意味を理解したかどうかは、実際に使えるかどうかという点である。頭の中にイメージとしてしっかりと残した後は、表現化できるようにしたいと考え、国語の授業の導入10分間を使い、楽しく表現できるように「ジェスチャーゲーム」で行うことを考えた。日本でも、外国語活動で単語や文例を覚えるために利用されている方法を、漢字指導にも応用してみようと考えたのである。このゲームによって漢字の使用法を知ることができるし、そのイメージを強化することにもなるので、イメージの定着を図ることができる。ましてや、ゲーム要素の強い活動は、どこの国の子どもたちも大好きであろう。このゲームをさらに盛り上げる方法として、時間制限の中で、リレー方式でみんなに問題を出し、漢字を使った言葉をジェスチャーで表現して、学級でいくつ正解できるかを目標にすることにした。そして、時間制限内で正解した数を黒板の隅に記録する。次回は、その正解数を上回ろうと自然と目標が生まれると考えられる。実際にやってみると、子どもたちは、楽しんで漢字を使った言葉を学習していった。

3. 家庭学習を通しての自主的な漢字練習を促す

(1) 家庭学習での漢字学習のやり方を指導する

自主学習ノートとして、子どもたちには1冊のノートを準備させた。日本語の習得、とりわけ漢字の習得には、学校の授業だけでなく、家庭の協力も得なければならないし、どのように学習していけばよいかを子どもたち自身が知っていなければならない。そこで、『学習の手引き』を作成し、自分一人でする漢字学習の仕方の効率的な方法を指導した。いずれ、子どもたちがその学習方法を身につければ、ノートの使い方と同時に、自分のアイデアを取り入れた効率的な学習ができることを期待した。以下は、『学習の手引き』の漢字学習についての記載である。

○漢字練習は自分テストで復習を！

漢字練習というと、よくみかけるのが、ノートに1行ずつ、同じ漢字をズラズラと書いていくというやり方。はたして、これは覚えるでしょうか？ 疲れてしまうだけで、まったくと言っていいほど、自分が漢字を覚えたという自信につながりません。

◆ミスゼロチャレンジで自分が覚えたかどうかを確認する！

この学習法は、まず1段目に番号と読み仮名を横に書いていきます。2段目に、読み仮名の下に漢字を書いていきます。○付けをしますが、正解している漢字には○、間違っているものには×をつけます。正直に×をつけてあげます。3段目は、間違った漢字だけ、もう1度チャレンジをします。つまり、自分テストをするわけです。正解している漢字はすでに覚えているのですから、再度行う必要はなく、間違った漢字のみを練習するという大変こうりつの良い勉強法です。

(2) 家庭学習でよい学習をしている子を紹介する

子どもたちそれぞれの家庭学習ノートのページをコピーし、なぜ、そのページの学習がよいかコメントとして書き添えた。そして、教室に掲示する。掲示されると、互いに学習方法やノートづくりの参考になるし、ノートの「型」がいつもそこにあるということになる。子どもたちは、いずれ自分たちのアイデアで学習をしてくるようになる。しかし、そこにははじめのモチベーションよりも低く、学習がいい加減になってくる恐れもある。そうした時期に、掲示物を再度振り返ることで、何のための家庭学習かを再確認することができる。

(3) 評価システムを取り入れる

自分の学習が果たしてよい方向に向かっているのかどうかは、やっている子どもたちにとってとても興味深いことである。そこで担任教師の評価をノートの1ページごとに書き記すようにした。評価は、A…◎ととてもいい学習をしている、B…○まあまあ、C…やり直しというものである。めったにCはないが、子どもたちは自分の学習の仕方に自信をもって取り組むようになった。評価されることを、意外に子どもたちは望んでいることが分かった。ただし、この評価には、明確な評価規準があるわけではない。教師の主観が大きい評価である。そして、子どもたちによっても異なる。現在の子どもの学力を見計らって、評価をするのである。私はそれでよいと思っている。子どもたちのハードルに合った評価をすることで、学習意欲につながるからである。

4. 授業と家庭での学びのリンクで漢字習得率のアップ

M児は、スペイン国籍の児童である。漢字の習得や運用については、本人も苦勞している部分がある。しかし、授業と家庭での学習を通して、5年生3学期から、漢字の習得や運用力の向上が見られるようになった。日記や作文、1分間スピーチなどで、漢字を正確に使うようになったのだ。また、M児は、毎月行われる「チャレンジ漢字テスト」で、5年生の初めの1回不合格を除き、6年修了まで、満点の成績を残すに至った。



M児の5年生時3学期のノート (漢字練習)

この変化は国語学習を通して、漢字を覚えて運用することを学び、家庭での学習も継続して行ったことが考えられる。

授業と家庭での学びがリンクしてこそ、海外でなかなか漢字の習得が難しい子どもの場合は、特によい成果につながるのではないだろうか。

5. おわりに

このマドリッド日本人学校には、純日本人の子どもたちばかりではないため、実践当初はとまどうことが多かった。子どもたちの実態を見極めようと努力したことから、日本での経験のみに頼るのではなく、いったん自分のこれまでの実践を子どもたちの学力向上のためにリセットすることも必要であった。しかし、どこにしようとも、教師としての役割だけは変わらないことがはっきりと理解できた。自分の指導を常に厳しく分析し、あらゆる子どもたちの実態に即した力をつける指導法を追究し続けることである。あきらめないことである。見捨てることである。励まし続けることである。この地での漢字指導の実践は、私にとって大きな知的財産となった。2年間を充実したものにすることができ、この地での経験を、また日本の子どもたちのために生かしていきたいと強く思うと同時に、更なる向上をしていきたいとも思う。出会った子どもたちに心から感謝したい。